　　　　　　　　　　どのようにして人は自ら手を使い始めるのか

―両手を握り物に触れようとしなかったKさんが自ら外界に向けて手を開く―

一橋大学大学院言語社会研究科

間野　明美

山梨重複研では、現在取り組まれている事例に加え過去の研究会で扱った事例を再考し伝えていくことを試みています。個別的な体験の中にこそ普遍的なものが含まれている、だから事例研究が大切なのだと考えています。

この事例は、中島昭美先生がKさんの学習の様子を見ながら解説する音声が入っている映像を中心に、当時の私の発表原稿、記録ノートなどをまとめ直し「山梨重複研2023冬季研究会」で発表したものです。事例についての中島先生の解説には大変深いものがあり、子どもたちから私たちはどのように学んでいくのかを教えていただきました。

１．Kさんとの関りの背景

目が合うとにこにこ笑いかけてくれるKさんの両手は、いつも胸のあたりで軽く握られていた。くるくる回るリングや動くおもちゃをじっと見つめ目で追うが、手が使えない状況ではないのにもかかわらず、決して自分からは手を出さない。外界に向かって手を使ってほしいと様々な教材で働きかけても自分からは手を開いてものに触れようとはしない。そのKさんが、学習を始めて半年後、初めて自ら腕を延ばし、手を開いて私の髪に触れた。その時のことは今でも鮮烈に記憶に残り、私にとっての原点となっている。Kさんとの学習の経緯は、感覚と運動の関係、姿勢、どのように人は自身の存在する「空間」を組み立てていくか、それらを支える「自発」をどのように考えるかなどを深く問いかけるものだった。重い障害のあるKさんの存在は、それ自体が大きな意味を持ち今でも人に影響を与え続けている。

この事例は1982年から1983年にかけての実践記録である。1979年の養護学校の義務制実施により重度重複障害の子どもたちが学校教育の枠組みの中へようやく入り始めたばかりという時代だった。初任者だった私は重心病棟での養護学校訪問教育部教員としてKさん他数名の子どもたちを担当した。医師、看護師、PT、OTが常駐する医療の現場で、教員にとってはまだ参考にできる実践事例もなく手探りで学習を試みる毎日だったが、そのような状況は、逆に純粋に、端的に、教育として何をすべきなのかを考えさせてくれた。

２．学習映像の概要と中島先生からのコメント

（1）取り組み当初のKさんの状況

　・重心病棟に入院し食事等全介助の生活をしている。病棟内での週2回の訪問教育（小学部低学年）

・自分自身で体を起こすことはできないが、マットの上に足を延ばして座る姿勢をとらせるとそれを保持できる。覚醒時はほとんど両手を握り合わせた状態でいる。

・ものをよく見つめ、人と目が合い、笑顔を見せ、イー、ウー、というような声を出すときもある。

(2)映像と中島先生のコメント要約

（☆：映像　★：中島先生のコメント　T：間野　）

☆Kさんはマットの上に両足を伸ばしてすわっている。手は胸のあたりで軽く握り合わせ、にこにこしながら向かい合うTの動きを目で追っている。

★TがKさんに手を使ってもらおうといろいろ働きかけているが、Kさんは手を使うまいとがんばっている。そのやりとりが面白い。Tをよく見ている。機嫌のいい時は顔や体を振って、組んでいる両手を放すときがある。完全に両手を固く握りしめているわけではなく、こすり合わせるようなこともする。

☆①タオル

TはKさんの頭にタオルをかけて手で取らせようとするが、手を取って促してもKさんは一向にタオルを取ろうとしない。

②鈴

Tが鈴を鳴らして見せる。目で追うが手は出さない。

★音にはあまり反応しないが、明るさにはものすごく反応する。光るもの、動くものには実によく反応する。

☆③ペンライト

テーブル付きの車いすで、Tがペンライトを動かして見せるととてもよく目で追う。

★“ものを目で追う”場面が次々に出てくる。光るもの、くるくる回るものがいい。目を近づけていくが見ているだけで決して手を出そうとはしない。

☆④光るリング

テーブルの上で小さいリングを回転させて見せると、吸い込まれるようにその動きを追いかけて見つめる。手は組んだままだが、顔をリングに近づけ目で触ろうとしているかのようである。

TがKさんの手を取り回転するリングを押さえる。

★一度ガイダンスをしたからやるだろうと思うが、決してやらない。目で追って体も近づけるのだけどね。

☆⑤透明カップ

Kさんは車いすに座っている。TはKさんの手の片方にカップをかぶせ、もう一方の手でそれを取らせようとする。Kさんは手を振ってカップをはずそうとしたり、もう一方の手をカップに近づけたりするが、カップをはずすことはできない。

だんだん表情も悪くなり動きが少なくなる。

★これは、ほんとに嫌らしく、最初は腕を振ってカップをとろうとするけれどあきらめてしまう。あそこまで手を持っていくけれど、ここまでなんだ。取ってくれ、と合図を送っている。

☆⑥バルーン

バルーンにKさんを乗せて揺らし、前へ回転させ床に手をつかせようとする。

TがKさんの握った手を離して床につかせる。両手を床につかせてもKさんはすぐに手を引っ込め握り合わせてしまう。

★バルーンに載せて転がしたら手を着くだろうと思っている。

“反射”とよく言うが、手を着くという行動を“反射”という言葉を使って簡単に片づけてしまってはいけない。そんなに単純なものではないとKさんを見ればわかる。頭が床に着いても決して手を出さない。無理やりTが手を着かせている

☆⑦光のスイッチ版

Kさんはテーブル付きの車いすに座っている。テーブルの上に置かれたライトを、笑顔で頭をかしげながらよく見ている。

Tが握ったままの両手をライトのすぐ手前のスイッチの上に載せ、スイッチを押させようとする。両方の肘がテーブルに着いた状態だが、時折肘を浮かせる。（スイッチを押そうとしているようにも見える）

TはKさんの両手を離させようとはしていない。

　★Kさんはこの教材をとても気に入っている。

Tが手を組んだままスイッチの上に載せ、手の側面を使わせようとしているところがいい。人は手の側面、手の甲から使い始める。その前に、肘、肩、あご、鼻・・・いろいろな所が使えるはずだ。そちらからやらせればよかったと今になると思う。

それでも少なくともやらせではなく、自分で、自発的にやってもらおうとTの考えが変わった。

人間の手というものの使い方の奥の深さが分かる。

簡単に、“この子は手を使わない”などと言ってはいけない。その成り立ちについて考えなければいけない。

☆（再び⑤の課題）

★（再び映された⑤の課題を見て）先生たちは根気よく、繰り返し気長にやっていくとできるようになる、という考えが強いからね・・・

☆⑧光のスイッチ版―ライトに被せたカップをはずさせる

テーブルの上に置かれた光のスイッチ版。ライトに被せられたカップの上にKさんの組んだままの両手を載せてカップをはずすようガイドする。スイッチ版をKさんのほうへ傾けカップをはずしやすいようTが働きかける。

Kさんはカップに顔を近づけ、口で触る。

★ついにKさんのお気に入りのライトに蓋をしてしまったね。

Kさんは手を組んだまま、あごを持っていき、カップに触っている。両手を組んだまま持っていき、手首をカップに引っ掛けて内側に引いている。手首を使っている。だんだん深くなっていく。

☆⑨Tの髪に手を伸ばして触る

Kさんがベッドに仰向けの状態でいるところにTが脇から顔を出す。するとKさんはにこにこ笑ってTの顔を見ながら両手を伸ばし髪に触り始める。初めて自分から両手を伸ばし、手を開いて微笑みながらTの髪の毛に触り続ける。

いったん手を戻し、ベッドの淵に触ってからまたTの髪に触る。自分の頭に触りTを見つめながら髪に触る。手を組んだり開いたりしながら触り続けている。

★このように如何なる場面でも手を使おうとしなかったKさんがTの髪の毛に触った。

★Kさんの手を使った初めての自発。

自分の髪に触り、Tの髪に触る。

Kさんがいい顔をしている。Tはそれ以上に喜んでいる。歴史的名場面。

人間が無理に手を使わせようとしても、あれほど使わないのに、ベッドに

仰向けで寝ていて人が顔を近づけたらその人の頭に触った。それも自分の

髪の毛に触って相手に触った。

手というものの本当の使い方の基本を表している。手を自分の口へ持って行っている。ここがまた面白いところ。

（3）その後のKさんの手の動きの広がり

私の髪の毛に手を伸ばし触れるようになってから、Kさんの手の動きは次々に広がりを見せた。ポンポンなど様々なものに手を伸ばし触れ、リング状・棒状の鈴を持たせると握って振り回すように動かし見つめる。集団学習の折には隣にいる子どもに触れようとして体をひねり寝返りをしそうな動きを見せるようになった。

３．考察

(1)「自発」について―負荷をかけて立ち直らせようとする課題では意図的なまとまりのある手の動きは起こらない―（場面①～⑥）

学習を始めて数か月間、①～⑥の課題ではKさんは自ら外界に向けて手を使うことはなかった。この間、手を使ってほしいと思い設定した課題は、本人が嫌う状況から抜け出すために手を使わざるを得ないところへ追い込むものだった。　片方の手にカップを被せてしまえばそれを取るだろうと期待した⑤の課題では、Kさんは手を握り合わせようともう一方の手をカップに近づけたりしたが、表情を徐々に曇らせ途中で動きを止めてしまった。バルーンに乗せて回転させ“反射”で手を出させようとしてもKさんは頑なに手を出さず、床に手を着かせても逆にわずかな瞬間をとらえて両手を握り合わせようとした。これらの課題は、後で考えれば、無理やり手を離させることで逆に手を握り合わせたくなる状況を作り、さらにはKさんの動きを止めてしまう状況を作り出していた。負荷をかけて手を使わせようとしても、Kさんが外界に向けて自発的、意図的な手の動きを起こすことはなかった。

(2)　まず、目で触り、口へ、そして手へ（場面⑦・⑧）

光のスイッチ版の教材はKさんの興味を引くものだった。この課題は、握ったままの両手で机上のスイッチを押しライトを点滅させるものであり、Tは両手を離させるような働きかけはしていない。Kさんは機嫌よくこの課題に取り組んだ。ライトにカップを被せ、外しやすく傾けて提示するとKさんは身を乗り出して顔をカップに近づけてきた。口で、そして目で触ろうとするかのように体を動かし、それから、握ったままの両手でカップに触れた。

中島先生は、目と手は反発し合い簡単には協応などしないものだと言われている。そして、「手を使う順序を考えなければいけない、いきなり手の内側を使うのではなく、手の甲、手の側面から使っていく。さらにはその前に肘、肩、顎、など様々な体の部位を使って動きを起こすことを考えなければいけない」とコメントされている。視覚によって形成された「自分の世界」と、体の各部位の触覚（手の動きも含めて）で確認できる「自分の世界」を丁寧に重ね合わせていく、その順序を考えなければならないということだったのではないかと思う。

(3)髪に手を伸ばして触るー見ること・手を使うことが重なるー（場面⑨）

　ものに目で触ろうとするかのような動きが起った後のある時、ベッドに仰向けの状態でいるKさんを覗き込み声をかけると、しばらくしてKさんはこちらをじっと見つめ私の髪に向かい手を伸ばしてきた。Kさんが自ら手を伸ばしてものに触るという行動を私は初めて目にした。Kさんは両手を離してにこにこしながらこちらを見つめ手の甲や側面で髪の毛に触れる。指に髪を絡ませたりたたいたりするような動きも起こった。Kさんが自ら手を伸ばしものに触れるということ、人が自発的に行動を起こすということ、その意味の深さに衝撃を受けた瞬間だった。

「見る」ことが先行していたところに「手を使う」ことが重なり、目で触れていたものに手で触れるようになった。目で見ていた髪に触れ、その感触を自ら確かめ感じ取ったのだと思う。このとき、Kさんに「見えていたもの」は自分の手を動かして得られる触覚により実感を持って「在る」ものになり、初めて自分自身の力で触覚的な実感のある「自分の場所」を作り出したのだと思う。

（4）始点・終点

さらに、中島先生はここでKさんが自分の髪に触れてから私の髪に触れていること、手を自分の口に持っていってから物に向かって伸ばしていることに注目していた。自身の体に触れてから対象に向かって手を伸ばすということ、それにより始点、終点が明確になる。Kさんはまず自分の毛に触り始点を作り、相手の毛に触って終点を作った。こうして自分自身と外界のものとの距離、奥行きというものができた。

空間的にも時間的にも始点・終点は重要であり、たとえば1本の線の始点・終点など空間上での位置や方向、1日の始まり・終わりや〇時から〇時までという時間の区切りなど、様々な物事の土台にあるものと思う。ここでは自身とそれを取り巻く外界の事物との関係を表すものとしてとらえられているが、文字や数の学習の基礎になる位置・方向・順序を考えていくためにも同様に重要な意味を持つことに、後日、他の子どもたちと関わっていく中で気づかされた。

(5)Kさんの姿勢について―均衡を保っている姿勢を一旦崩して再構築する―

Kさんは仰向けの状態から自力で起き上がることはなかったが、関りの当初から椅子に腰かけ

る姿勢、マットの上に足を延ばして座る姿勢を取らせるとそれを保持することができていた。その姿勢は崩れることなく、両手を握り合わせることでバランスを保っていたということも考えられる。中島先生は、「ダルマのようにバランスが良すぎるのもよくない、固定したバランスを一旦崩して再構築できるような働きかけが必要である」とも言われていた。

Kさんが初めて髪に手を伸ばし触れたのは仰向けの姿勢においてであり、いつもの座位とはものの見え方も聞こえ方も異なっていたはずである。髪に手を伸ばし触るようになった後には、仰向けの状態から足を動かして体をひねり寝返りを打つような動きを起こすようになった。 “座らせられた”姿勢でバランスがとれ固定した状態を一旦リセットし、仰向けの状態から自力で姿勢を作っていくことを最初からやり直し始めたようにも思われた。

固定されたバランスを一旦壊して再構築することの重要性は、状況は異なるが、自閉症の子どもたちとの関わりの中でもたびたび考えさせられた。自分の世界を一旦壊して再構築すること。一旦作り上げた枠組みを壊したりまた作ったりと柔軟に繰り返していくこと。難しいことではあるが、これは子どもたちに限らず誰にでも言えることかもしれない。子どもたちにそのきっかけとなるものを提案し手伝っていくのが様々な教材や姿勢による関りなのだろうと思った。

４．おわりに

手を使うことを強制する稚拙な関わりと失敗の連続ではあったが、とはいえ、ただ興味・関心のありそうなものを提示し自然に任せるような場を重ねたり、情動に訴えたりするだけでもKさんは自発的に手を使うという行動の変化を起こすことはなかっただろうと思う。どのように手を使い始めるのかについて一つの考え方をゆっくりと拡大して見せてくれたKさんの事例は全く個別的な一事例ではあるが、多くに通じる多様な視点を提示してくれている。

また、昨今、オンラインが日常的に使われ多くのものを素早く得られる効率的な生活ができるようになり恩恵を受けているが、この事例を振り返りながら視聴覚主体では得られないもの、実感のある触覚や味覚、臭覚など様々な感覚の大切さについても改めて気づかされた。

※本稿は「K.A.の観察・指導の経過―手の動きに視点を置いてー」『重複障害教育研究会第10回全国大会』資料、1982年　及び「手の動きに視点をおいた指導の経過」『肢体不自由教育no.63』1983年

の原稿と当時の記録、映像を元にまとめ直したものである。

【山梨重複研2023冬季研究会での意見交換から】

〈事例についての補足〉

・養護学校が義務制になった直後の事例。重度重複障害の子どもたちの学習をゼロから考えた時代ある。今であれば「レット症候群」という診断名がつくであろうお子さんだが、診断名により関わり方が変わることはなかったと思う。目の前の子どもの状況は変わらない。

・関わりの当初は手を離して使ってもらうことばかり考えていた。用意した教材は逆効果でうまくいかなかった。その後、握ったままでよいから手を使ってほしいと関わり方を変えた。教材に対し、Kさんは少しずつ手を握ったまま動かしたり、握った手を口に近づけたりし始めた。

・仰向けの状態で髪に手を伸ばす場面は通常の学習場面ではない。偶然ベッドに近づいて、Kさんを覗き込んだ時の映像である。Kさんは初めて自ら手を伸ばして髪の毛に触った。だから、教材が必要ない、ということではない。(間野)

〇中島先生の生の声を初めて聴いて感動した。研究会に参加してよかった。

髪の毛を触る場面。人と人とのかかわりが根底にあった。教材でのかかわりに感動したが、大切なのはそこに至るまでの試行や様々な試みがあってこそだと思った。（山梨・福澤）

→Kさんとのかかわりが楽しかったから続けられた。どうしたら手を使ってくれるのか、楽しかったから考えることができた。

Kさんが髪に手を伸ばした場面は、たまたま前の日に切った私の前髪をKさんに見せてあげようとした場面である。たくさん失敗したからこそ、いろいろ考えた。情動でつながることも大切だが、空間、バランス、背景にはいろいろな意味がある。（間野）

○映像から感じたこと。

・Kさんはずっと光を見ているのだから、光を動かしてみる。ずっと音を聴いているのだから、音の出る物を渡してみる。いろいろ失敗をする中で、子どもたちから手がかりをもらっていた。

・事例の行間から、中島先生の深い考えがわかる。中島先生は事例をご覧になり、子どもたちがどんなことを考えているか、どんなことを行っているかを説明してくれた。

・教員は、ともすれば『こうしなければならない』という常識的な見方しかできない面がある。ちょっとしたことで気づかないことがたくさんある。中島先生はそこを見せてくれた。

・楽しくてわくわくする時間が、子どもたちとのかかわりでどれだけ持てるか。（東京・野村）

○中島先生から学んだ手の使い方について

・映像で実際の場面を見るとよくわかる。中島先生のお話はすごいな、考えさせられることが多いな、と思う。

・『手には４つの使い道がある』

①　自分と外界をつなぐ手

②　自分の体を触る手

③　あいさつをする手　身振り　はじめとおわり

④　操作する手

・４つの手の使い方からKさんの学習を見ると、

④教材を机に置く

②手にかぶされたカップを取ろうとする

①髪の毛を触る　自分と相手をつなぐ

と言える。

・自分の髪の毛と間野さんの髪の毛を触る場面。『触覚を交差する』。相手の髪の毛なのだけど自分の毛のように触る。相手と自分が向き合った実感としての交差。外界に対してつながりたい、交わりたいという思いから、思わず手が伸びる。

・上体を起こした時に髪の毛を近づけたらどうだっただろう。手を伸ばしただろうか。姿勢が違う。仰向けの方が、見るだけでは手を伸ばしやすかったのだろうか。そのような意味で考えさせられた。（札幌・菅原）

→上体を起こした姿勢では、手を伸ばさなかったのではないか。Kさんは上体を起こすと、手を握り合わせてダルマのようにバランスを取って座っている。仰向けでは、背中の触覚もありバランスが取れているのではないか。この場面の後、仰向けの姿勢から少しずつ横向きへと体を起こすようになった。

・バランスは大事だが、良すぎるのはどうか。一回バランスを崩して、再度バランスを作ることが大切だと思う。自分の世界をいったん壊して再度構築すること・・・これはどの子どもにも誰にも言えるのではないか。

・もう一つ、『はじめとおわり』も重要である。髪の毛を触った時、Kさんはまず自分の毛に触っており、自分の髪の毛が出発点になっている。そして相手の毛に触って終わりになっている。空間的にも時間的にも始点・終点は大事。たとえば一本の線の始点・終点など空間上でのここからここまで、一日の始まりと終わりなど時間の区切り。様々な物事の基本形になる。　この『はじめとおわり』の考えは、形や文字、数の学習にも通じると思う。（間野）

○学習場面を撮影したときのこと

・今、あの頃が蘇ってきた。あの瞬間に立ち会えて、あの場面は今も心に残っている。中島先生に実際に指導場面に来ていただき、学習の様子を見ていただいたこともあった。

・間野さんは、いろいろな教材でKさんにかかわり、「これはどう？」「どう思っているのかな？」と語りかけていた。（神奈川・赤堀）